



(1) ハイブリッド留学

英語力不問・現地授業料無料の工学院大学独自の留学システム。英語力が留学参加へのハードルとなりがちな工学系の学生に向けて、海外で大学専門科目授業（日本語）を受講し、現地での語学授業（英語）と日常生活（英語）を体験するというハイブリッドな語学環境を提供する。ディプロマット留学等の本格的な留学への第一歩になると同時に、行動力やグローバルな思考力、英語力を取得する。

(2) 工学者のための数理・データサイエンス・AI教育プログラム

2020年度にスタートした同プログラムは、現在全学部で文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」のリテラシーレベル・応用基礎レベルに認定。同プログラムを通じて、データを読み解く能力、適切なデータの収集・抽出・分析能力、AIを活用した課題解決能力を備えた工学研究者の育成を目指す。

(3) DX実践ラボ

デジタル変革（DX）の波に対応し、産業界で直ちに活躍できる高度情報専門人材を育成するため、新宿キャンパスに新設。大学院情報学専攻では、DX人材育成のためのカリキュラムを新たに設置。産業界からDX実務経験者・DX資格保有者を特任教員として招聘し、実際の現場で使われているDX技術を身に付けられる実践教育を行う。
なお、この事業は、文部科学省の「令和5年度大学・高専機能強化支援事業」に採択された。

(4) キャリア形成・就職支援

就職キャリア支援センター、学生センター、教員・研究室が相互に協力する独自のキャリア支援プログラムとサポート体制で、学び・研究を活かした就職を実現。毎年安定した就職率を維持し、2024年3月卒業の就職内定率は98.2%。さらにその半数以上が第1志望の企業となっている。

工学院大学のキャリア形成・就職支援



「これからの時代の『DX』×『工学』とは」
 近年のAI（人工知能）の台頭など、工学分野は目進月歩で技術革新が進み、変化の著しい学問領域というイメージがあります。工学院大学の源流となる工手学校では、工業中心の産業を盛り立てるべく、最先端の技術を習得することが学問の中心でした。その後、工学院大学となつてからはより専門的な技術者のニーズが高まり、学問の中心も最先端の技術研究と工業研究者の育成へと移り変わりました。そして、工業技術がますます高度化・複雑化し、多様な融合から新たな知見・価値を創造

する21世紀型ものづくりが可能なら、創造力、発信力および柔軟性に富む人材が求められています。
 「モノづくりからコトづくりへと変化する時代の要請に応じて、私たちは社会に貢献する『工学』に向き合ってきました。この先も、新たな価値を生み出していく原動力となりたいと願っています。そのために必要なことは、これからの時代を見据えた『工学』の再定義です。『工』という文字には多様な意味があります。それらの意味の一つひとつを丁寧に確認しながら、本学が取り組むべき新たな『工学』を考えていきたいです」と今村学長は工学院大学が志向すべき、未来の工学について語ります。

新たな定義の一例として今村学長が挙げるのが「何かと何かをつなぐ学び」です。例えば30年先の未来を見据える先進学部は、「今」と「未来」をつなぐ学びであり、暮らしと環境に寄り添う空間づくりを考える建築学部は、「まち」と「人」をつなぐ学びです。
 「研究活動の意義は、最先端の知識や専門的なスキルを身につけるだけに留まりません。むしろ研究過程で身に付く思考力や論理を展開する力、忍耐力、創造力、共創力といった能力こそ、社会に出てからも成長し続け、技術の進化に対応できる素地となります。また、研究の過程では、必ずしも努力に見合った成果が出るとは限りません。試行錯誤し、迷い、落ち込むこともあります。しかし、そうした経験が人間としての深みを引き出すのです。本学は、そうした豊かな人間性を持つ工学の担い手を育てていく場でありたいと思います」と今村学長はこれからの工学院大学のあり方を語っています。



いまむらやすひさ
今村保忠学長
 1983年東京大学教養学部基礎科学科卒業。87年同大学理学系研究科関連化学課程博士課程中退。89年理学博士（東京大学）、専門は生物化学、マトリックス生物学、細胞工学。米国ウイスコンシン大学マディソン校客員研究員などを経て2006年工学院大学助教授、08年教授。副学長、理事を経て24年から現職。

欧米諸国に比肩する先進的な国づくりを目指し、1887（明治20）年に創立された私学初の工学系高等教育機関である工手学校にルーツを持つ工学院大学。以来、137年にわたり工業分野の最先端で活躍する優秀な人材を輩出してきました。現在は4学部15学科と大学院工学研究科を有する工業系大学として、約6,000名の学生が新宿・八王子の両キャンパスで、新たな知識・技術の習得や研究・課外活動に動んでいます。

2024年に10代目学長に就任した今村保忠学長に、「これからの工学院大学の姿をどのように描き、今後どのような取り組みを進めていきたいか」、そのビジョンをうかがいました。また世界規模で急激に変化する時代における『工学』のあり方を語ってもらいました。

工学院大学

〒163-8677 東京都新宿区西新宿1-24-2 アドミッションセンター TEL 03-3340-0130 <https://www.kogakuin.ac.jp/>

社会・産業と最先端の学問を幅広くつなぐ『工』の精神を深化・発展させ、「21世紀工手」の育成を目指す

これからの工学院大学における三つの基本方針

今村保忠学長は新学長就任にあたり、今後のさまざまな取り組みの基本となる三つの方針を表明しました。一つ目は「大学が元気になる」施策の実施」です。
 「大学が元気になる」とは、学生が意欲を持って学ぶことができるしくみをつくることです。学生一人ひとりが持つ小さな可能性を大きく広げるためのカリキュラムの充実などを進めていきます。また、学生だけでなく教職員が熱意を持って働くことができる環境づくりにも取り組みます。
 二つ目は「研究・教育活動の充実」です。学生は研究活動を通じて、実社会での経験に匹敵する多くの経験を積むことができます。研究活動を充実させることで、対外的なプレゼンスを高めていき、その成果を教育に反映させていくという循環を目指します。

三つ目は「レジリエンスなシステムづくり」です。レジリエンスは「回復力」「復元力」「耐久力」と訳され、高いニーズがあり、その道に進みたいと願う学生がいるのであれば、全力でバックアップをしたいと考えています。学生一人ひとりの持つ小さな可能性を、大学が大きく広げていく。学生の希望を応援する本学の取り組みは、今後も継続していきたくていすね」

学生の可能性を広げるための教育プログラム

工学院大学独自の留学システムであるハイブリッド留学は、20、21年

れる言葉ですが、今村学長が求めるのは「柔軟で自己修復力があり、持続していくことが可能な大学組織」です。工学院大学が長い歴史を経て積み重ねてきた、研究成果や人のつながりといった貴重な財産を次の世代に受け渡していくために、持続可能な大学組織をつくりあげます。

今村学長は「これら三つの基本方針の実現のためには、学生と教職員、研究と教育などの関係がうまく循環していくことが重要」と強調します。

「学生が意欲的に学ぶための教育環境を充実させることで、学生はよりよい研究者として成長し、卒業研究などで業績をあげることができます。研究によつて対外的な評価が高まることで、多くの優秀な人材が集まり、教育や研究の質がさらに高まっていく。学生と教職員、研究と教育がうまく循環し、螺旋状に前へと向かっていくことが理想です。そうした豊かな研究・教育の環境があれば、次の世代へと持続する大学を実現することも可能になります」

例えば、工学分野以外の分野との教育研究推進の取り組みでは、これまでシンポジウムの開催など学術研究レベルが中心に進んできました。それをさらに教育レベルにも反映させることを目指しています。



新宿キャンパス